幻想郷に飛ばされたけど加速を操る程度の能力が強すぎる

⊠さかな⊠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校帰りに車に跳ねられて死んでしまった時雨桜（しぐれさくら）しかし目が覚めた時目の前には女神がいて転生しないかと提案された！

目次

第一章古代編
第1話女神に煽られた ―――― 2
第2話どうやらここは幻想郷らしい……なんか時代おかしくね？ 7
ここが古代文明とか意味わからん 11
第4話神様とご対面 ―――― 16
第5話お偉いさん、そして妖怪 20
プロフィール ―――― 25
第6話守るために戦ってるとこに爆弾落とすか？ ―――― 30
第7話俺ってなんの神なん？いや女神？ ―――― 36
第8話使いとして行ったら恩神の姉がいました ―――― 40
第9話神とタイマン？そうだ、俺も神だわ ―――― 45
第10話諏訪子鍛えるってよ ―― 50

第一章古代編
第1話女神に煽られた

「……　ヘッヘックシ!んー?ここどこ、…　なんだー山かー……　はっ!?なんで山!?そうだ俺車に跳ねられて、死んで、なんか転生しろ的なこと言われた気がする!」

数時間前

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛やっと学校終わったよぉ、さっさと帰ってゲームしてぇよオ、走って帰るか!」

とにかく早く帰りたかった俺はカバンを背負い教室をダッシュで出ていった

しばらく走ると青だった信号が点滅し始めていた

「ウオオオオアアアア　，　ω，）／アアアアアッッッッ!!!!!!青信号ぉ!!まだ赤になるなぁ

！」

信号を渡ろうとした瞬間かえりたい一心でそんなに周りを見てなかったため近づいてくる車に気づかず

ドゴン！

「ブベラッ！」

跳ねられた……

そして目が覚めた時には

「おぉ死んでしまうとは情けない、」

王道なセリフで煽り散らかしてくる

「は？」

「ごめんごめん1度やってみたかったんだよ？ｗまぁ女神ですし許してよ、ね？」

女神がいた……

「いや、意味分かりませんて」

「ダヨネ～だって君即死だったもんね、死ぬ直前の記憶なんてないか？ｗ」

なんなんだこの女神、人の死を煽り散らかしてくる癖に女神って……

「ほんとに女神なんすか？あなた？」
「モチのロンよ？ｗ私は女神セイラ、若くしてぽっくり逝った人間を、転生させたりさせずにＨＥＡＶＥＮ（天国）かＨＥＬＬ（地獄）に送ってるよ」
　ほんとに女神らしい、確かに人間離れした見た目はしてるけど
「ほえ～」
「君は？」
「え？」
「いや、君の名前は？」
「あぁそゆことすか、俺は時雨桜（しぐれさくら）です」
「なるほど、桜君よ！」
「は、はい」
「君転生しちゃいなよ！」
「ウエ？」
　突然転生できることになった、喜んでいいのか？
「場所とかはこっちで決めるけど、記憶の有り無し、特典とかの詳細は決められるよ」
「マジすか、なら記憶はそのままで、能力は加速に関係する感じの能力にしといてください」

「ＯＫ、ならあとは転生するだけだね～、転生先に行ったら一応能力の使い方みたいなのがあると思うよ、まぁ数十分くらいしか一緒にいないけど楽しかったよぉ！イッテラー!!」
「こちらこそっておぉぉぉおい」
真下に穴が開き、俺は落ちていった

現在

今に至る
我ながらとんでもない経験をしてる気がする
「えーと能力のトリセツ的なのがあると聞いてたが……　これか、」
『桜くんへ転生お疲れ様？ｗ急に落としてごめんね？ｗまぁそんなことよりも君の能力についてだけど、君の能力は加速を操る程度の能力って能力だよ、簡単に言えば物体とか自分の周りの一定範囲の時間を早くしたりできるよ、君の種族は半人半妖だから加速してもあんまり寿命縮むにダメージはないから安心しなよ?まぁそんな感じだから頑張って～』
どうも半分人外になりました

「まじかよぉぉぉ!!!」

第2話どうやらここは幻想郷らしい……　なんか時代おかしくね？

「えっ、何俺人外なの？まぁしっぽもあるしな…」
まぁいいか、能力のデメリットがほぼ無いようになっただけだしな、
そんなことを思いながら説明の続きを見る
『半人半妖の妖の方は俗に言う妖狐だよ～容姿も私の好みに合わせて変えといたからね？ｗまぁ何度も言うけど頑張ってね～　ｂｙセイラ』
「あいつの好みってなんだよ、ん？なんか手鏡もある……　はっ!?なんじゃっこりゃぁぁぁぁ!!!誰やねんこいつぅぅぅ!」
手鏡を見ると目の前には銀髪美少女がいた
「嘘…　だろ……（　；ω；）つまり今俺の息子はもう……」
軽くショックを受けた、そりゃあいつも一緒だった相棒のような存在が急に無くなったから当たり前だろう
サワサワ
「ほんまに無いやん……　はぁ、てかここどこなんだよ…　さっきから展開が急すぎ

て疲れたわ…」
とりあえず周りを散策してみることにした

散策中

「とりあえずここが深い山だってことはわかったな、色々木とか生えてるし」
２０分くらい散策してみたがずっと木、木、木で埒が明かなかったため休憩している
「ほんとにあの女神はなんの説明もなしに…」
「キャァァァ」
「え? 誰の声?!」
女神のことを愚痴ってたらどこからか悲鳴が聞こえてきた
「とりあえず行くしかないか!」
声のした方へ進んでいくと銀髪の少女が妖怪に襲われていた
「まさかの初戦闘かよ!」
俺はとりあえず妖怪に向けて飛び蹴りを食らわせた

『ギャン！』
「よし！効いてる！大丈夫だった？」
「あなた誰？」
「俺は桜、通りすがりの半人半妖だ！覚えられたら覚えとけ！」
　某世界の破壊者のセリフを若干ぱくった自己紹介を軽く済ませ再び妖怪の相手をする
「ちょうどいい機会だ能力も試してみるか、⊠加速！⊠」
　能力を使った瞬間妖怪の動きがスローに見えた、どうやら俺だけ周りより速度が加速しているため遅く見えているようだ
「こんなに鈍いなら余裕だな！おりゃ！」
　ズコン！
『グギャァ！』
　加速された蹴りがとてつもない威力を発揮し妖怪の頭が消し飛んだ
「うぇぇグロ～…」
「あ、あの助けてくださりありがとうございました」
　さっきの少女が、お礼を言ってきた
「気にすんなって、俺もたまたま通りかかっただけなんだから」

「そうですか、あなたは人間ではないんですよね?」
「まぁそうだね、耳もしっぽもあるしね、君名前は?」
「私は八意永琳と言います」
　おっと?
「ちょっと待って、もう一度言って貰える?」
「いいですけど、八意永琳です」
　どうやら聞き間違いじゃないようだ、どうやらここは幻想郷らしい・・・　そして古代スタートというわけらしい
「深刻そうな顔をしてどうしたんですか?」
「ごめん現実逃避をしようとしてた・・・」
「?」
　あぁまじかよよりによって古代スタートかよ、主要キャラに会うために何年かかんだよぉぉぉ!!!

ここが古代文明とか意味わからん

「桜さんでしたっけ?その~狐の妖怪なんですか?」
「そうだよ、でもまぁさっきも言ったけど半分ね」
　そうここがややこしいのだ、どこまで人間でどこまで妖怪なのか自分でもわからんのだ　、あの女神めめんどくさくしおって……
「どうです?私たちの都市に来てみませんか?」
「え?」
　都市って言った?この時代に?
「俺妖怪なのにいいの?」
「狐妖怪なら姿変えたり妖力隠したりできるんじゃないんですか?」
　そっか俺妖狐だったわ
「なるほどその発想はなかった」
　永琳に言われた通りに俺は耳としっぽ隠し妖力も抑えた
「準備出来ました?」
「おう!いいよ!」

移動中

「着きましたよ」
「（っ，ワ，ｃ）＞エグスギイイイイ」
目の前にはめちゃくちゃ栄えた都会があった、なんならビルとかタワーとかめちゃくちゃ並んでる
「てか永琳こんなに栄えてるとこにいるのになんで山になんていたの？」
「薬に使う薬草の在庫がなくなりまして」
「なるほどね」
「とりあえず私の家に案内します」
「Σ（゜・ω・）オオ!!」

再び移動中

「お帰りなさいませ八意様」
「ええ、ただいま」

「お邪魔します」
「そちらの方は？」
「薬草を取りに山に言ってた時に妖怪に襲われていたところを助けてくださった桜さんです」
「そうでしたか」
永琳が（多分）お手伝いさんに俺がいる経緯を伝えた
にしてもこの家すげぇや現代よりも豪華だよ近未来すぎ
「もしかして永琳って結構えらい？」
「まぁそこそこね、この後もっと偉い人のとこへ行くわよ」
「まじですかい」
永琳より偉いとかどんなとこに住んでんだよ・・・
永琳に「準備があるから適当にくつろいでて」と言われたため、お言葉に甘えてくつろぐことにした

２０分ほど経ってから準備を終えた永琳がやってきた
「さぁ行くわよ」
「おー、でもなんで俺も行くんだ？」

「あなた結構強いでしょ？」
「まぁ多分そう」
「今この都市の兵士の士気が下がっているの、隊長の教え方が下手ってのが原因なんだけど、適任がいないからあなたを紹介しようかと」
「分かります？俺半分妖怪だけど一応体は女よ？」
　そう忘れがちだが、俺は心は男だが体は女なのだ
「まぁ何とかなるでしょ」
「ウソーン」
　拒否権なんてなかった

　　移動中

「ここがこの都市の管理をしているツクヨミ様がいるタワーよ」
「（っ，ワ，ｃ）＞エグスギイイイイ」
　何度でも言おう（っ，ワ，ｃ）＞エグスギイイイイこの時代に建つような建物じゃない
「これを登るの？」

「そうよ最高階の１２０階にね、エレベーターを使えば五分で着くわ」

まさかのエレベーター登場で草

「まじかよ」

俺と永琳の２人はエレベーターでツクヨミの元へ向かった

第４話神様とご対面

ウィーーーーーン……　チン！
「着いたわよ」
「なんか思ってた以上に速かったなぁ」
現代のエレベーターよりも音が静かで揺れがほぼ無いし、あの独特のＧの感じも無いというハイスペックだった
「んでここがツクヨミ様の部屋か？」
「ええそうよ、最初に私が話すから少し待っててね」
そのまま永琳はドアへ向かいノックをした
コンコン
「どうぞ」
中から女性の声の返事が聞こえた、多分ツクヨミなのだろう
「失礼しますツクヨミ様」
「今回はどのような要件かしら？」
「先程薬草を取りに山へ出かけていた時に妖怪に襲われまして、旅人の方に助けていた

だきました、ですのでその方ならば今の兵団の隊長よりも適しているのではという提案を」
「なるほどね、その旅人とは？」
「桜、入ってきていいわよ」
　お呼びのようだ
「どうも時雨桜と申します」
「あら、女性なのね」
　体はな！
「ええ、ですがツクヨミ様実力は本物です」
「そう、なら兵団の現隊長とどちらが上なのかはっきりさせましょうか…」
　というツクヨミの提案を聞き俺は嫌な予感しかしなかった

　数分後

「けっ！こんなガキが俺よりも優れてるだ？舐めてんのか?!」
　……　どうしてこうなった
　あの後俺は兵団の隊長と戦うことになり、見た目のせいでめちゃくちゃあおられてら

というわけです
「ツクヨミ様！永琳様！さすがに巫山戯てます？俺がこんな女に負けるわけないでしょうに！」
「いいえ、あなたは負けると思いますよ？まぁやって見れば分かることです」
「へっ！なら秒で終わらしてやるよ！」
　あぁまた話が勝手に進んでくよ……
「んじゃまぁよろしくお願いします？」
「挨拶なんていらねんだよォ！死ねぇクソガキィ！」
　兵団長は挨拶も無しに思いっきり殴りかかってきた
「あぁもう知らねぇぞ！☒加速！☒」
　俺はもうどうにでもなれの精神で加速を使い兵団長の攻撃を避けまくった
「あぁ?!なんで当たんねぇんだ！」
「おせぇんだよ！」
　ダァン
「グボァ！」
　加速しているため兵団長の攻撃をいなし、そのまま顔面に蹴りをぶっ込んでやった
（手加減はしたよ？）

「コンノォガキィ!!!」
　顔面に蹴りをもらいブチ切れた兵団長が俺につかみかかろうとするが・・・
「遅～い」
　スカッとハズレ、兵団長はバランスを保てずずっこけた
「じゃあこれでトドメかな?ｈａｒａｐａｎ!」
「ゴファ!」バタン
　起き上がってきた瞬間に懐へ潜り込み見事なｈａｒａｐａｎを決めてやった
「イエーイ俺の勝ち!」
　勝ったということは・・・　もしかして
「どうです?ツクヨミ様」
「ええ、採用よ」
　あらま（・・ω・、）俺が新しい兵団長だ

第5話お偉いさん、そして妖怪

まじか…　勝ってもうた、兵団長（元）がぶっ倒れとりますわ
「桜だったかな?こっちにきたまえ」
ｏｈ……　ツクヨミ様に呼ばれた…
「な、なんでしょう」
「素晴らしい戦闘だったよ、そして君時間を早めるあるいは飛ばしたりしてなかったかい?」
さすが神様だ俺の能力ほぼバレてるじゃん
「分かるんですね…（^^;;）」
「まぁこれでも神様だからね、そして君半妖だろ?」
「へ?」
何故だ…　なぜバレた…　永琳曰く隠せば行けるはずだったのに!あ…　永琳が終わったって顔してる…　え、何俺処分されるの?
「その反応からしてあたりなんだろう、心配することは無いさ君からは多少の穢れを感じるには感じるが悪い奴ではないと分かる、実際永琳を助けてくれたしね」

「ア、アリガタキシアワセー」
「急に片言になるね」

そんなこんなで俺は半妖であることがバレつつも正式に兵団長として任命された

色々飛んで3年後

「やぁぁぁ！」
「はぁぁぁ！」
「よっと」
ブゥン
「あっ！団長また時間加速しましたね！ずるいです！」
「そうですよ！」
「ごめんて依姫、豊姫」
そう、今俺は結構お偉いさんである綿月姉妹の稽古をしてる…正直キツイ、だってめ

ちゃくちゃ強いんだもん！
「まぁ今日はここくらいにしとこう」
「「はい！」」
「もう２人は月に行く準備は終わったのか？」
　そう俺が来てから３年経ったがどうやら穢れが多くなってきたらしく月に移住する計画が進んでいた、そして妖怪たちがそれを阻止しようと来る前に出発するらしい
「はい、私は終わりました、姉さんも終わってます」
「そうか、もうそろ妖怪たちが攻めてくるんだっけか？」
「そうですね、私と依姫も戦おうとツクヨミ様に行ったのですが断られてしまいました・・・」
「そりゃあそうだろ・・・　お前らお偉いさんだろ・・・」
　そうです偉いんですよこの２人、なんで俺が稽古つけてるんだろ・・・
　ウーウーウー
「なんだ！」
『緊急！緊急！妖怪の群れが接近中！戦闘員は戦闘準備に！その他は避難及びロケットへ急いでください！』
「まじか！おい！豊姫依姫！お前たちも早く行け！」

「でも！」
「団長は！」
「俺は兵団を連れて妖怪たちを食い止めに行く！お前たちは行くんだ！
　おい！第５班２人を援護しつつロケットへ急げ！」
「「了解!!」」
「さぁ２人とも行け！」
「「団長！」」

　俺は泣きそうな２人を見送り戦場へ向かった

「こりゃ酷いな・・・」
　戦場へ着くとうちの兵団達がボロボロになりながら戦っていた
「お前たち！もう引け！早くロケットへ急げ！」
「だ、団長・・・　何言ってんすか！」
　あーこれめんどいやつだ・・・　無理やり飛ばすか！
「⊠加速⊠加速異動！（アクセラレートムーヴメント）」

俺は新しく習得した技加速異動（時間を加速させつつ団員を指定の方向に押し出すとその方向に有り得ん速度で飛ばすことが出来る）を使って無理やり団員をロケットへ飛ばした

「よし！さぁてお前らよくもうちの団員痛めつけてくれたな！覚悟しろ！」

プロフィール

ここでは今作の主人公時雨桜（しぐれさくら）のことを紹介していこうと思います☒
一応ネタバレ注意です☒

時雨桜（前世）
身長１７０ｃｍ
体重５５ｋｇ
体型細いけど必要な筋肉はしっかり着いてる（いわゆる細マッチョ）
そこそこモテてるが彼女はいなかった
好きな物　餅
嫌いな物　漬け物
普通の学生だったのに車に跳ねられて死んでしまった男、その後女神に転生させられる

時雨桜（転生）
身長１５５ｃｍ
体重４０ｋｇ
体型しっかりと出るとこは出てるナイスバディではなくＢよりのＡカップ
依姫と豊姫には稽古をつけているが成長スピードがエグすぎで最近能力が無いときついらしい
好きな物変わらず
嫌いな物変わらず
種族３分の１人間神妖怪（妖狐）
なにかに化けたり狐火出したりできる
毛並みはフワフワ、髪と毛は薄桃色で若干銀
能力加速を操る程度の能力
時間を加速させられるくそチート
自分だけを加速させることによって相手よりも高速で移動することが出来る、加速中は相手のスピードがスローに見える、攻撃も加速されているため普通に殴るよりも火力

がバカ高い、団長（元）は加速されたｈａｒａｐａｎを食らって白目むいてぶっ倒れた（よくそれで済んだな）

物を加速させることも出来る、例えば種に使えば花が咲くしそのまま加速し続けると枯れる

範囲は狭いけど空間をまとめて加速することも出来る（ぶっちゃけこれが１番のチート）射程内の生物の寿命を半強制的に進めることが出来る

加速異動第５話で団員を飛ばすのに使った技、団員を指定の方向に押し出し、加速させて異動させる技（生物以外でも問題なくできる）異動する運動を加速させてるだけなので寿命とかは縮まらない

ＷＡＲＮＩＮＧ

ここから先は予定プラス今後出てくる設定とかのネタバレ要素満載なので見たくない人は見るのをここでやめましょう

桜
刀
時
桜

切った相手の傷を使用者の指定した状態で固定する（簡単に言えば切られ状態で時を停められて回復しようとしても治らない）

桜花爛漫

桜が使う奥義（仮）の予定

時桜で相手を舞いながら切り刻む鬼畜技、切りつける度に加速していき、最終的には加速しすぎて技が終わっても斬撃だけが相手を切る、ただ負担が大きい

百花繚乱

桜が使う奥義その2（仮）の予定

性能は桜花爛漫の劣化、でも普通に強い

雪桜眼鏡（ゆらめき）

桜が使うカウンター技（予定）

相手の攻撃を加速して回避し時桜で3～5くらい切りつける

はっきり言おうこれはチート技です

加速してるからほぼ回避できるし当たれば時桜の効果でダメージが固定されます

第６話守るために戦ってるとこに爆弾落とすか?

「⊠加速⊠!・うぉぉぉぉ!」
　ズガァン
『グギャン』
　ドゥウン
『ギュア』
　加速された俺の蹴りにより妖怪たちの体がぶっ飛んで行く
「てか、どんだけいんだよ・・・ きりがねぇな」
『ナンダアイツハ、サッキマデノニンゲンヨリツヨイゾ』
　うわぁー強いやつの判定された、まぁそりゃそうか
　ズゥォォン
「どうやらロケットは発射されたみたいだな」
『クソ!ニガシタカセッカクノエモノドモガ!』
「獲物じゃねぇよ!」
　ドゴォン

『グゥエ』
本当に多いな…
ヒュゥーーーー
「なんあれ… 落ちてきてね?」
古代??文明進みすぎ??月行く??証拠隠滅??爆弾で消し炭??妖怪も消える
「あれ、結構これってやばい?」
てかもう着弾しそうじゃん!
「あ……」

【ロケット】

「あ!八意さま!」
?!依姫と豊姫!桜は!桜は見なかった?!」
「それが… 団長は守るために残られてしまいました」

「え…　そんな…」
　永琳が崩れ落ちる
「流石に桜でもあの爆発ではもう…」
「「団長……」」

　なんやかんや一億年後

「んーー!んあ?ここどこだ?なんかの空洞かな?か…　でも神社ある、まだマシか」
　あれ確か俺は妖怪と戦っててそんで…　そうだ俺理不尽にも爆弾で（爆殺）されそうになったんだよく生きてたなぁ
「あのー、どちら様でしょうか?」

目の前の美少女に尋ねられた
「俺は時雨桜って言うもんです」
「そのー言いずらいんですけど妖怪ですよね？」
「そうだね、半分だけどね？」
なんだろうさっきからよそよそしすぎないか？
「そうなんですか、でも・・・　何故全裸なんですか？」
「へ？」
え、全裸？・・・・・・・・・　はぁ?!
「うおー！なんでー！そっかあれか！爆弾！　燃えたのか！」
「なんだい騒がしいね、由奈何かあったの？」
「あっ諏訪子様、桜狐ノ洞（おうこのどう）の掃除に行ったら人っていうか半人半妖の方がおりまして」
「半人半妖？ってまさか！」
「うわぁー恥ず・・・　何俺素っ裸で寝てたの？」
「ねぇあんた」
「ヒョ？」
「ツクヨミ様って知ってるかい？」

んーとあのケロケロ帽からして諏訪子かな?
「知ってるけど…」
「やっぱりね、あんた名前は桜って名前だろ?」
おっとツクヨミ様色んな神様に言いふらしてるパティーンか?
「そうですが…」
「本当に存在したんだ…　あんた一億年そこの空洞で石みたいな状態で眠ってたんだよ?」
ん?今聞き捨てならないことを聞いたな…　一億年?
「つまり俺は一億歳!?」
「ツクヨミ様があんたの事を私に頼んだんだよ…　そこの空洞で眠らしてやれって」
あれまツクヨミ様優しい、でも一億年経っても生きてるの異常じゃね?半人半妖つまり半分人間なんですけど…
「まぁ半人半妖なのになんで生きてるのか不思議に思ってるだろう?」
「お、おう…」
「あんた信仰せれて神格化したんだよ」
「は?」
「だからあんたは半人半妖だったのが3分の1人間3分の1妖怪3分の1神様ってこ

と」

「はぁぁぁ!?」

人外超えて神になりました

第７話俺ってなんの神なん?いや女神?

「そんでさ、あんた眠ってる時は狐になってたから分からなかったけどなんで全裸?」
「ツクヨミ達が月に行く時都市を消そうとして爆弾落としたんだよそれで服全部消し飛んだ」
「なんか苦労したんだね…」
　同情するなら服をくれよ…
「てかさ、気になってたんだけどどうして俺神になったん?いや女神か?」
「あんたそんな口調してるのに女っていう自覚あったんだ… ツクヨミ曰く月であんたは英雄として崇められたんだと、それで信仰が集まって神格化したんだよ。そんでそこの空洞で私が適当に恋結びの神様が祀られてるよって広めたら思ってた以上に客が来てね、だからあんたは恋結びの神様だよ（＊^ ^ ＊）」
　えっ、何何俺を信仰するとリア充増えんの?
「まじかよ……　てか服貰えんかね?」
「分かっよ、由奈用意してもらえる?余ってた巫女服あったよね?」
「分かりました諏訪子様、では桜様こちらへ」

「はいはーい」

数十分後

「ほえ～以外に着心地いいね」
　由奈から渡されたのは蒼色の巫女服、スカートじゃなくて袴タイプの巫女服だ
「お気に召したようで良かったです」
「あー、あれだ敬語じゃなくてもいいからね？歳は馬鹿みたいに離れてるけど精神年齢は１６くらいで止まってるからね」
「いえ、そんなことは出来ませんよ、桜様も神様なんですから」
　めっちゃいい子じゃんそんでめっちゃ可愛い
「由奈～！どう？着替え終わった？」
　そんなどうでもいいことを思っていると諏訪子が呼びに来た
「はい、今終わりました」

「おお、以外に似合ってるね～」
「そんなにか?」
　見た目がいいのは認めよう
「そういえば桜様も能力持ってたりするんですか?私はあらゆるものを治す程度の能力を持ってます」
「俺か?俺は加速を操る程度の能力ってのを持ってるよ」
「「はい?!」」
　なんか諏訪子もびっくりしてんのなんなん?
「あんた今なんて言ったの?」
「え?加速を操る程度の能力って言ったけど?ツクヨミ様からなんも聞いてないの?」
「いやいやいや、能力についてはなんにも言われてないよ、てかあんたの能力規格外すぎるよ…」
　そんなにやばいのか俺の能力
「てか諏訪子様の能力は?（知ってるけど…）」
「私かい?私の能力は坤を創造する程度の能力だよ、簡単に言えば大地に関する能力だよ」
「２人も十分強いじゃん…」

「あなた（あんた）よりはマシですよ（だよ）」
「さいですか……」
「てかさ、諏訪子様って俺より多分年下だよね？」
「まぁそうかな？」
「じゃあタメ口使ってもいい？」
「えーまぁいいよ」
そうそう忘れてた、俺一億歳！
ヒュウーーーー
「ん？」
スコン
文矢って言うのかな？飛んできた
「なんこれ？」
「何何～えーと……」
「？どうした諏訪子？」
「どうしました諏訪子様？」
「……　どうしよう桜…　戦争申し込まれた…」
「また戦争かよ…」

第８話使いとして行ったら恩神の姉がいました

「戦争申し込まれたってどうするんですか諏訪子様」
「どどどどうしようも何も向かい打つしか…」
「落ち着けお前ら」
「でも桜ァ」
　まぁ全面戦争ってなると分が悪いからタイマンにして貰えんかなぁ
「説得しにいけないのか？」
「んー、行けなくはないけど私がここを離れるわけに行かないしなぁ、桜行ってきてくれない？」
「俺かよ……」
「だってその方が安全で早いんだもん、由奈は危ないから行かせられないし」
「一応聞いとくけどいつ来るのその御相手は」
「……後」
「はい？」
「３日後！」

「分かりました俺が行きます」
　すぐじゃねぇか！
「本当に！ありがとう！」
「でも説得って言っても戦争じゃなくてタイマンにしてもらえるか頼むだけだぞ？」
「？誰が相手するのさ」
「え？お前だよ諏訪子」
「う…　嘘（　；ω；　）」
　こいつ俺がやると思ってたのかよ…
「こういう風に戦争申し込まれてんのはお前が舐められてるからだろ…　なら舐められないように力を示すしかない」
「そ、そんなぁ」
「まぁ行ってくるよ…」
「うん、行ってらっしゃい（　；ω；　）」
「☒加速☒」
　シュン
「「早ァ！」」

「ここかな？すいませーん」
　それっぽいところに着き門の前に降りてノックをしてみる
『何者だ！』
「諏訪の使いだ！そちらの神と話をしに来た！」
『何？諏訪だと？如何します神奈子様』
「通せどうせそいつとも３日後にどうせ会う」
『かしこまりました』
　ギギギギギ
「お邪魔しマース」
「ほう、お前が諏訪の使いか、名はなんという」
「時雨桜だ」
「桜か、どんな要件だ」
「戦争じゃなくてお宅の神さんとうちの諏訪子のタイマンにして欲しくて来た」

「なるほどな、少し待てアマテラス様に話を通すお前も来い」
「まじか」
いきなり軍神様の神奈子が来たと思ったら次はアマテラスだァ？神のバーゲンかよ…

「アマテラス様！諏訪の使いが戦争ではなく一対一での勝負をと提案されましたが如何しますか？」
「そうですか、良いでしょう…　ところでその使いはどのような者なんです？」
「どうも時雨桜です」
「時雨桜……　もしかしてツクヨミと会ったことある？」
「ありますけど」
「えっ?!お前諏訪の使いでは無いのか！」
「神奈子落ち着きなさい…　そうでしたかツクヨミ曰くそろそろ復活するとは聞いてましたが…」
「どうゆうことですか？アマテラス様」

「そのものは約一億程前ツクヨミが作っていた都市にいた半人半妖、いや今は神と人と妖の複合と言った方がよろしいかしら?」
「そうスっね」
「こいつがツクヨミ様言っていた・・・」
「そうゆうことよ」
「あの～もしかしてツクヨミ様と姉妹ですかね?」
「そうよ妹が世話になったわね」
はぁ俺の知り合いやばい人しかいないよ・・・　いや人じゃなくて神だわ

第9話神とタイマン?・そうだ、俺も神だわ

「そうだ桜、ひとつ提案いいかしら?」
「ん?なんすか?」
「大和側に着く気は無い?」
　おっととまさかのここに来て勧誘来ましたわ
「えー、まじですか?」
「もちろんタダでとは言わないわ、神奈子とのタイマンに負けたらこちら側に着いてもらうわ、でもあなたが勝ったらことらがわにつかなくてもいいし、そちらの諏訪の神様が万が一負けても何もとったりしないことを誓うわ」
「アマテラス様?」
　うわー誘い方上手いなおい!
「わかったよ」
「何故だ、私を置いて話が進んでゆく…」
「では2人とも外で始めなさい」
「「分かりました」」

移動中

「よし、どうすんだ?」
「普通にどちらかが戦闘不能になるまでいいと思うのだが」
　ポケモンバトルかよ
「ではそれで行きましょう、２人とも用意はいいですか?」
「「もちろん!」」
「始め!」
　なんかもう長引くと辛いから速攻でやってやんよ、新技行くぜ!
「崩時（ブレイクタイム）!」
　グゴゴゴゴ☒辺りがゆっくりになる☒
「さてと普通に火力高いの叩き込めばいいかな?こういう時のために用意しておいてよかったなぁ」
　辺りの妖力と霊力、神力を１つに合わせる

「桜刀時桜、行くぜ【百花繚乱】!!」
　ズガガガガ
「そして時は元に戻る」
　グシャ
「え…!?」
　バタン
「そこまで!·まさかここまでとは」
　やばいやばい思ってたよりこのコンボ凶悪すぎるヤバいって神奈子フルボッコだよ多分俺は3分くらいの感覚だけど、2人からしたら多分一瞬すぎて何が何だかわかってねぇだろ!
「えーとなんかすいません、俺の能力で自然治癒速度あげますので許してください」
「気にしなくていいわよ、でも神奈子痙攣しながら失神してるから頼めるかしら」
「ウッス」
「アガアガッ…　ピクピク」

数十分後

「!?ここは!」
「あっ、起きた」
「ヒッ!」
　うわ引かれた!悲し!俺死にたい!あ…俺一回死んでここにいるわ
「ほんとすんませんした」
「い、いや気にするな…わ、私の力量不足だっただけだ…ブルブル」
　めっちゃ怯えとりますやん
「あら、神奈子起きたのね。まさか何もせず一瞬でやられるなんてね」
「本当に驚きましたよさすがにこやつ強すぎます」
「そういえば最後に持ってたあの刀は何?」
「あー、これですか」
　再び時桜を出す
「これは霊力神力妖力の３つを合わせて作ってみたらできた産物です」

「「ふつうそんなことできないから！」」
「マ？　」
「普通は反発して形になんてならないわよ、なるとしてもありえないくらい時間立たないとならない……あっ、能力」
「お前本当にイカれてるな色々と」
　何故だ俺はなぜこんなに引かれるんだ!!

第１０話諏訪子鍛えるってよ

「とりあえずそろそろ俺は諏訪に戻るよ」
　諏訪子のこと鍛えないといけないしなぁ…
「そうか、また暇な時来るといい、なんならやっぱりこっち側に着くか？」
「天照様、冗談でも私はちょっと遠慮したいです…」
　あっ神奈子には死ぬほど嫌われてるわ（　；ω；　）
「まぁどうせすぐ会えるでしょ、じゃあまた！」
　シュン
「あやつやはりとてつもない速さですね」
「そうね、なんなら私よりも強いんじゃないかしら」
「だとしたら本当に規格外ですよ…」

移動中

「おーい戻ったよー！」
　庭で諏訪子と
「あっ！おかえりー桜！」
「おかえりなさい桜さん」
「で、どうだった？大和は」
「なんか、急に神奈子っていう神様とタイマンさせられたよ」
「は？（？＿？）」
　やばい諏訪子がガチ困惑してる
「ち、ちなみに結果の程は」
「俺が時加速させて瞬殺しちゃった（、＞∀＜、）ゝ」
「ねぇ桜やっぱり私の代わりに・・・」
「だーめ、条件はお前と神奈子のタイマンってことになってるから俺は手を出しませーん、後俺が神奈子に勝ったから万が一諏訪子が負けても何も取らないってさ」
「良かったぁ・・・　でも戦うのは確定なのかァ」
「そうだね、だから今から俺が諏訪子を鍛えます」
（（（（（（（（（（。　。。　　）↑全力で距離をとる諏訪子

「何距離とってんだ、当たり前だろお前弱いだろ」
「うへぇわかったよぉ」
　わかったよぉじゃないんだよ、あと三日だぞ！
「じゃあ今すぐに始めるからな」
「えぇ～」
「お前3日しかないの忘れてるだろ…」
「うっ、はーい」
「よろしいそれじゃまず初めにだなぁ・・・」
　んん～瞬殺したせいで神奈子の戦闘スタイル全然分からねぇ
「いやめんどくせぇ！諏訪子俺との組手で鍛えるぞ」
「（　⊠?⊠　）ヒュッ（息を引き取る音）」
「諏訪子様頑張ってください！」
　由奈も俺と同じくらいスラアク子に対して遠慮ないのかもな

準備中

「さぁ諏訪子どっからでもかかってこい！」
「ええい！もうやけだ！喰らえ！鉄の輪！」
　シャンシャン
「ん～遅い！軽い！」
　キィン
　軽く足で蹴り返す
「ええ結構強く投げたのに！」
「何よそ見してるんだ？」
「え？」
『崩時』
　シュン
　ドッ！
「うっ……おおぉ〝え〟」
「さぁまだまだ、元教官のスパルタは終わんねぇぞ？」

「そ、そんなぁぁぁ!!!」
その後も俺と諏訪子は一方的に苦しい特訓を行い続けた

「諏訪子」
「はい！」
「もう俺が教えることはない！全力で神奈子に勝負してこい！」
「はい!!!」
俺たちはこの３日間死ぬほどの特訓（一方的）をしてきた、最終日の昨日は俺の『崩時』（さすがに少し手加減した）に対してしっかり対応出来るほどに諏訪子は強くなった
「よし！行ってこい！」
「諏訪子様！頑張ってください！」
「よーし！やってやるぞぉ！」